

## 横浜の明治期・大正期を生きた

### メソヂストの信徒たち

三輪 順 康

20世紀から21世紀に移る頃、横浜上原教会の会員で近現代史の第一人者であった斎藤秀夫氏らは横浜市で広報誌編集に協力して、『五重苦を乗り越えて横浜は生きている』・・・『開港以来、市民はそのたびに、苦しい体験を乗り越えて新しい街を作ってきた』と謳われた。五重苦とは①関東大震災、②昭和の恐慌、③戦災、④接収、⑤人口爆発である。開港以来の横浜の都市形成はあまりにも急激であった。横浜市は、吉田新田に始まり、今のMM21地区の形成まで、ほとんど埋め立てによって作られ、横浜村と称された寒村から大都市へと変遷し、港湾都市特有の労働力のニーズもあって、多くの人々が全国各地から集まって都市が形成されてきた。

それだけに明治の横浜には様々な歪が生じ、市民には苦難が噴出した。メソヂストの信徒は苦難に立ち向かい、見捨てることなく対峙した。教会（日本メソヂスト横浜教会（通称：蓬萊町教会））の牧師らは記録に、教会史に当時のあり様を記録に残された。一部を紹介（下記「」内）する。

「明治二十三年には春の頃より物価暴騰して、細民の困窮一通りでなく、其夏に至りて悪疫流行したので、その困難更に甚だしきを加うるに至った。然も貧民の罹患するもの多く、目も当てられぬ状況を現出したので、あたらしく教会に生まれた婦人慈善会はその使命に奉公の一涙を澆ぐべく起こつた。先ず太田町の仮事務所を施米所に充て、その他、相沢、扇町、戸部方面に救済所を設け、施米および施飯を為し、貧民に金品をも給与した。この恩恵に浴したものは、実に二千七百九十五人であつたといわれておる。・・・」と田中亀之助牧師が書き残した。婦人慈善会は信徒の稲垣寿恵子等が作った組織で、後に「根岸の赤病院」と

呼ばれ赤く塗られた「慈善病院」をつくった。

メソヂストの宣教師マクレーが日本上陸後、教会は、山手から下って長者町から蓬萊町へと移って行った。長者町時代には、今でいう地区センターのような活動拠点だが、明治18年に『横浜福音館』が作られ、英語夜学校、書籍縦覧所（図書館か？）寄宿舎、諸集会所等が事業化された。これには二宮安次、深沢久作、尾藤徳吉、石田良助、ヘッケルマン、スワルツ氏、野村洋三、等が参画した。

「二宮わか」は、「貧民児童の教育普及を目的」として教育事業にも力を尽くし、警醒小学校を設立。生徒の大半が授業料免除された。1900年（明治33年）には愛隣女学校（手芸学校）を設立。

また「相沢方面は貧しい少数階級の人々が多く住まい、他の人々から賤しめられた気の毒な境遇にあつた。バンバテン女史いたく之を憐れんで、明治26年（1893）、小学校をその部落の児童のために設けた。」（相沢の地名は今無い。山元町から西竹の丸あたり。）更に「日露戦争の勃発後家族の窮状を見て明治38年には相沢託児園を開設。約80名の幼児に入浴と午睡をさせた。」

二宮わからは、中村愛児園を「所謂八幡谷の貧民窟の児童」のために考え、「最初は畳の上に板を敷いて」特殊小学校をスタートし、「毎朝礼拝を行い乳児には午前十時に牛乳、午後三時におやつ、正午に副食物を給し、幼児には三時におやつを与え、冬は園児にスープを給与する。・・・」「二宮わか」は1921年（大正10年）から横浜市の方面委員（現在の民生委員）の1人だった。託児園には方面委員の紹介があり家庭調査の後入園が許可された。大正13年からは中村愛児園と称した。

福祉という言葉すら無い明治大正期の信徒たちの活動は、今の時代と同じ福祉活動だと首肯できる。異なることは、当時は多くの宣教師たちによる物心両面の協力と協調があったことだ。横浜の信徒は何の外連味もなく、外国から来た宣教師とスクラムを組んで立ち向かい、手を差し伸べた先は、社会の底辺で生きる戦争孤児、弱い子ども達、病弱者に向かっていた。困窮

者には教会が手を出さねばならない。当時の国や社会には弱者を支える理念は存在しなかった。教育の普及にも心砕いた。6年制の義務教育が整えられたのは1907年(明治40年)だった。経済的に貧しく、働こうにも手に職を持たない人々のために、職を付けるべく手芸学校を開いた。信徒が手を差し伸べる先は、生活の臭いのする場であった。これは《生活者重視》の理念で、セツルメントの思想だ。

その他にメソヂストの活動では、足尾鉍毒被災民救済活動や、ドレーパー親子が二月の寒い晩に耳にした山の手を歩く盲人の悲しげな笛の音が契機となって、見捨てられていた盲人の救済活動が起り、横浜訓盲院の事業に進んだことなどを挙げねばならないが、別稿を参照願いたい。

最後に明治から大正期にかけて、横浜には多くの困窮生活者の町があった。明治期・大正期のメソヂストの信徒たちは、そんな町に住む社会の最下層と取り組んできた。これはいつの世も、今の世も考えねばならないことだと言ったら言い過ぎであろうか。この報文がそのことを学ぶ《よすが》となればさいわいである。

## 武藤富雄の遺したものは何か

小笠茂美

### 1、はじめに

武藤富雄(1904~1998)は、まさしく20世紀を走り続け、93才に逝去された。

人生を前半と後半生にわけて見ると判りやすい。前半は東京帝国大学法学部を卒業、裁判官、そして満州国官僚などを歴任した。後半は日本キリスト教団補教師に就任、キリスト新聞社社長、教文館社長、明治学院院長などを歴任した。

つまり前半はエリート官僚として立身出世街道そのものであり、後半生はキリスト者として試練に耐えつつキリスト教界のリダーの歩みであった。彼の劇的な人生を理解するために次の通り記したい。

### 2、恩師

彼は三人の恩師の信仰に導かれ、その人物に感化された。

#### ①ウエンライト

サムエル・ウエンライト(1863-1950)は米国南メソヂスト教会宣教師として来日した。武藤は第一高

等学校学生の時、青山学院で開かれた英語弁論大会で、神を批判した発言を聞いたウエンライトは、親しく武藤を導いたことで師弟の交わりが続いた。満州国の官僚の武藤に対し「役人をやめて伝道者にならないか」と勧めた。やがて10年後に受け入れた。

#### ②佐波巨

佐波巨(1881-1951)

佐波は日本キリスト大森教会牧師で、武藤が25才の時に洗礼を授け、信仰者として指導した。佐波は東京帝国大学を中退し、東京神学社に学んだ、この経歴からも、武藤に対し、親近感をもったようである。佐波に妻澄江夫人を武藤は信仰の母として尊敬した。武藤が伝道者としての務めを佐波は指導し応援し続けた。

#### ③賀川豊彦

賀川(1881-1960)

賀川と武藤の出会いは満州時代であった。武藤は賀川の密室の祈る姿に感銘を受け、終生、師として仰いだ。

「私は賀川のもとにあって、15年間、ともに働き親しく先生の人格にふれた。賀川の偉大さを体験した。」と述懐していた。

### 3、悔い改めの後半生

武藤に対し、ある老牧師は「戦中は軍の肩を持ちながら戦争の負けた途端に上手にキリスト教に入りこみ、キリスト新聞などで幅をきかせ、戦犯をのがれて平然としている。」ときびしく批判した。武藤は誠実に受けとめた。

武藤は満州国官僚であったことを懺悔し、悔い改め、あがないの道を歩んだ。

「満州国の歴史的意義について、これを論ずる資格はない。しかしこの建設にたずさわった私には、いくたの奢りがあった、それは神の前に罪として告白せねばならない。」と述べていた。

次の武藤の発言に注目したい。

「東条英機の葬儀に参列した時は、私自身が彼とともに絞首刑を受けた思いであった。私は一旦死んで、新たな人生に出発しようとの意志をこの時固める結果となった。」

### 4、平和への決意

武藤の悔い改めの歩みは平和運動にあった。キリスト新聞の標語として「平和憲法を守れ 再軍備絶対反対」をかかげた。

平和運動を進めるため、政治の世界に参加し、社会

党を強く支持した。後に民社党を支持したが、平和運動のために超党派としての参加が必要と思い、共産党の機関誌で核兵器廃絶を主張した。さらに日本キリスト党を創設し、国会議員に立候補したが、落選した。やがてキリスト党は消滅した。

## 5、キリスト教界の働き

多彩な働きがあったが、主なものを要約する。

### ①キリスト新聞

キリスト新聞の創設のかかわり、長く社説や記事を執筆し、教界へのご意見番の役割を果たした。ただ賀川豊彦全集の出版で、人権を侵害する誤ちをおかした。

### ②教文館の再建

教文館が経営危機に瀕していた時、乞われて専務、更に社長に就任し、再建へ導いた。

### ③明治学院の発展

学園紛争に時期で、学生運動に対処し、学院の最高責任者としての院長職に励んだ。紛争の対処はいろいろな問題を残したが、建学のキリスト教精神を守った点は評価できる。

## 回顧録「寄生木の歌」

### から探る山室民子の葛藤

牧 律

山室民子は日本救世軍士官山空軍平・機恵子夫妻の長女であり、『寄生木の歌』は、昭和11年11月11日～昭和12年4月20日まで『日刊基督教新聞』に掲載された、民子36歳の時の青春回顧録である。この中で彼女は、自身の誕生から母機恵子が逝去した17歳までを振り返りながら、彼女の内面に起こった数々の葛藤を詳細に記している。それは端的に言う、「なぜ自分より他者を優先しなければならないのか」という疑問であり、彼らの活動の拠り所であるキリスト教精神に、自分を添わせきれない苦しみであった。本稿では、この清貧をモットーとする救世軍士官の家族として暮らした民子の葛藤に焦点を当てた。

### 幼少期～思春期

生来利発な民子は、幼少期からどのように振る舞えば親が喜ぶのかを敏感に察していた。彼女は自発的に自分の楽しみや、ささやかな欲を我慢する自己抑制の姿

勢が、親を非常に満足させる行動であることを感じていた。同時に他方で彼女には、美しいものをこよなく愛し、忌まわしいものを嫌悪する生来の気質があった。しかし贅沢なことを忌避する救世軍の宗教的信条の中で、母機恵子は子供たちにその主義を徹底して守らせる。それ故民子が美しいものに焦がれる気持の深さ、その満たされない気持ちの中に潜む今の生活を懐疑する葛藤の大きさに母機恵子は気づかない。それは生来恵まれた生活を享受し、既に十分に物心共に満たされた生活の中から、より高い精神性を求めて求道し、キリスト教に辿りついた母機恵子の想像の及ばないことであった。また民子は非常に利発な故に、知的好奇心の旺盛な少女であったようだ。「青踏社の婦人」に関しての雑誌や新聞にも目を通し、彼女たちが真面目に婦人問題を扱っていることを知り、「彼女たちがそんなに悪い人々であるとは思えなかった」と当時の思いを書き記している。民子は次第に親から教えられてきたこと・世間で言われていることに対し、成長と共に違和感を持ち始めてゆく。親の言うことに無条件に追従した幼少期の頃と異なり、自身の感覚で物事を捉え始めていた民子は、エリク・エリクソンの言う、自己同一性の達成にむけて歩み出している。

### 他者を救済する側に位置づけられる子供

民子が両親の救済事業とその根本理念であったキリスト教に葛藤したのは、親から与えられるのではなく、親と同じポジションに立ち、他者に自分のもの（自分が受け取るはずのもの）を譲ることへの深い恨みにも似た気持ちがあったからである。両親には子供たちを慈しむ気持ちはあったものの、貧民救済事業に取り組み、いつも多くの救済者と共に暮らし、貧しい予算の中で彼らを養わなければならない状態であったため、結果として民子たちはいつも彼らの後回しにされる状況であった。しばしば救済した人々の食欲が旺盛で食事が足りなくなり、そのようなとき民子たちは空腹のまま辛さを忍んだという。そしてこのような経験は、民子の心に深く暗い影を落としていた。子供として親から与えられるのではなく、親と共に与えることを強いられる辛さは、親にそのことを強いるキリスト教精神への懐疑にもつながり、「自分にも欲求を満たす権利があるのではないか」という恨みにも似た気持ちが深く大きくなって行ったのである。

## 自己アイデンティティ崩壊の危機

そのような中で年頃の娘になった民子は、オシャレをしたい盛りなのにそれも叶わず、父軍平からは「救世軍士官になってほしい」と紙面公表され、自己の欲求と親が求める方向性の違いに悩むようになる。そしてついに絶望感に打ちひしがれ精神のバランスを崩し「精神衰弱」と診断され床に伏すようになる。思春期の民子が陥った「自己アイデンティティ喪失」の危機的姿である。心配した機恵子は、色々手を尽くして看病するが、娘の病の根本には、積年の生活の中で、「あるべき姿」を強いられ、「本来の自分」を出せないことへの、恨みに近い鬱積があることに全く気がついていない。

このように葛藤する民子の姿から見えてくるのは、親の社会救済事業への情熱と、宗教的方向性を十分に理解しながらも、神が望んだという名のもとに、自己犠牲的選択を親から強られる事に対する拒否と葛藤であるといえよう。宗教の名のもとに下される「自己犠牲」精神の奨励と教育は、このように、次世代に伝えようとするとき、その宗教的信条が、それを自覚的に選択するまで時間のかかる子供たちに伝えるときには、時に大きな抑圧を彼らに与える危険とまさに隣り合わせなのだという、一つの大きな示唆を民子のケースは与えてくれる。その後民子は17歳で母機恵子が逝去した後、アメリカに渡り8年に及ぶ欧米留学を充実して過ごした後に、27歳で宗教的回心を経験する。その回心は心身共に充実し、楽しかったというアメリカでの留学生活無しには得ることができなかったのではないと思われる。以上の事柄は、親の信仰とその宗教理念に基づいた家庭生活が、子供にどのように影響するのかを検討し得る1つの実証的なケースとして見ることができるのではないだろうか。

## コベル師殉教と娘マーガレットの美談伝説

海 老 坪 眞

コベルは教育宣教師として1920年8月サンフランシスコから香取丸に乗船、同船に偶然後日彼の妻になるチャーマも宣教師として乗船していた。

コベルは1920年9月から関東学院で社会事業部や神学部の学生が活動としていたセツルメントに積極的に関与していた。彼の信条である平和への志に希望を

与えられたのは1928年8月の「パリ不戦条約」に日本も調印したことであり、その文言を校内の廊下に掲げていたことは坂田祐著「恩寵の生涯」93頁にも載っている。

1939年8月：第23回日本バプテスト東部組合年会記録の第5回常任理事会の協議「人事に関する件」に、コベルについては「関東学院坂田院長より学院を辞するよう奨められたれば働きを定められ、坂田院長より同氏の学院教授たることを辞するに至りたる経過を報告し、同氏のため適当なる働きを考慮せられ度しとの要求あり」><決議：コベル氏を杉並、目黒、幡ヶ谷の関係宣教師たらしめ、・・・>とある。

コベルはこの決議に従って東京でそ働きをしたか？彼のその後の動向が意見の分かれるところであり、私は概ね次のような流れと考えている。

コベルは学院を強制的に止めさせられたとは読み取れない。「辞するよう奨められた」時、彼は諸般の事情を察して院長の立場を配慮したと考えられる。そこで院長は東部組合理事会に今後の働き場を考えて欲しいと申し出たと読み取れる。

コベルはこの時期に米国の宣教師派遣本部に日本以外の場を希望する書状を出したと考えられる。その結果、コンゴかフィリッピン（パナイ島）の二者択一の回答が届いたので彼は後者を選んだ。そこで在日の宣教師委員（ベニンホフ、アレン、ライダー、フート、ファーナムそしてコベル）は1939年4月29日に委員会を開催してコベルを「日本に留まるよう」にと米国の宣教師派遣本部に強く要望している（“the Home Board be strongly urged to keep them in Japan”）との資料が日本バプテスト同盟事務所の資料棚にあった。

以上からしてコベルは「日本退去を命じられ」>（「関東学院 125 年史」144 頁）や「滞在延長を認められず」>（「関東学院の源流を探る」114 頁）ではなく、彼の希望でパナイ島へ行ったと私は理解している。

コベル夫妻と長女マーガレット、長男デビッド、次女アリスは1939年6月、横浜港からパナイ島に向かい、暫くして子供達は帰米している。彼はパナイ島イロイロ市にあるセントラル・フィリッピン・カレッジでの働くのが主とした仕事であった。

1941年12月、大東亜戦争（アジア・太平洋戦争とも言う）開戦前の2月、米国陸・海軍省は軍人家族に帰国命令を出し、米国民間人には連絡しなかった。

12月10日、日本軍はルソン島上陸、18日にはイロイロ市に初空襲あり、市長は市民に避難を勧告しコベ

ル達も従った。

1942年4月、パナイ島に日本軍上陸。コベル達は更に山奥に避難した先を「希望の谷」と命名し、青空礼拝場を設置し、近隣の人々も交えて百人をも越える礼拝を共にしている。【その場所に私達5名は2003年3月に行ってきた】。

1943年後半、日本軍はパナイ島討伐作戦を開始。降誕祭の準備中の12月19日、日本軍が迫ってきて逮捕された。翌20日、処刑前コベル達は祈る時間を要求し、許可され一同は祈った後、全員は日本刀で切り殺された（コベル47歳、チャーマ48歳）。

両親殉教の事実がマーガレットに届いた時、彼女は最初信じられなかった。後日、殉教が真実であると知った頃、丁度大学を卒業した彼女は両親の日本宣教の志を前向きに受け止めて日系人の収容所で奉仕する決意をした。そしてコロラド州グラナダ収容所で働いた。

この話題は米国バプテストのミッション・マガジン1954年12月号に掲載されていて、《・・・彼女はある収容所で捕虜のために最善を尽くした。・・・日本人捕虜はこの行為が神の愛に基づいていることを知り、数ヶ月後には多く捕虜達が信者になった》と記載されている。更にその記事が1956年6月の関東学院大学のKanto Timesの39号に転載され、これが更に美談伝説へと発展したようである。

真珠湾攻撃隊長の淵田美津雄中佐は敗戦後、米国から帰国する捕虜に面談した中で、苦労話も聞いた一方、《K大尉の語るには、終戦後になってから一人の20歳位のアメリアのお嬢サンが現れた。彼女の両親は宣教師でルソン島の山奥で日本軍に殺害された。やがて終戦と共に事の次第を知らされた彼女は苦悩と憎悪から人類愛へと転向した》と文芸春秋1952年7月号に淵田自身が“真珠湾から11年”の中に載せている（169頁）。

一方、2008年6月発行「真珠湾攻撃隊長の回想 淵田美津雄自叙伝」313頁には例のお嬢サンがコベルの長女マーガレットになっているし、両親の殉教も1943年12月ではなく敗戦の年、パナイ島ではなくルソン島となっていて、文芸春秋とは違っている。この自叙伝を読んだ人々がコベルの殉教とマーガレットの奉仕を美談として一人歩きしているのは問題である。【以上、制限字数もあって極めて簡略したので誤解とか異議のある場合はご教示を歓迎したい。】

## 若き植村正久の信仰と宣教

吉 馴 明 子

昨年出版された雨宮栄一の植村正久伝3部作のうち、第1巻「若き植村正久」が扱っている植村正久の伝道活動が本格的にスタートするまで時期について、彼の回心と伝道への使命感について考えたい。

植村正久は1858年生まれであるが、この間の主な出来事としては、1873年にバラから受洗、東京一致神学校卒業後1880年下谷一致教会牧師就任、1882年山内季野と結婚、1883～1886年名古屋や高知での伝道に携わるほか、雑誌への寄稿、『真理一斑』『福音道しるべ』を刊行、1886年富士見町教会の前身である麴町教会のスタートをあげることが出来る。

植村正久の生家は旗本1500石で、芝露月町に615坪の屋敷、他に大久保と本所菊川に拝領屋敷を持つれっきとした旗本だった。ところが、武芸はおろか役所勤めにも関心を持たない「風流人」の父袴十郎は、植村家を相続することができなかった。そこへ維新の大変革が重なり植村家は、領地の千葉もあきらめて1868（明治元）年横浜へ出「柩しげなる9尺間口の家」を借り薪炭業で「露の命を繋ぐ」こととなる。1500石以上は寛政11年のデータで上位一割に属すということなので、この零落のさまは文字どおり「江湖に落胆を極めた」ものであった。この中で藩医の娘であった気丈な母の「汝は武士の子なれば、健気なる壮夫となりて、家を興し名をも挙げよ」との励みだけが正久の支えであった。近くに加藤清正の祠で「身の行く末を祈り」、「ある時は清正の武具して威风凛然と立てる画像を仰ぎ見て、勇猛の気自ら総身に充ち、精神一到何ごとならざるべきと雀躍して、家に帰りしこともありき」と植村は当時を語っている。清正詣りは、「精神一到何事かならざらん」の思い、「志」を確かめる業であった。

ところが英語を身につけるべく入った(1870)石川の家塾では書生達の「日習を罵り、因循を嘲り、神仏を悪口する」風潮に、植村自身も「神のことも清正も皆胸中を退き去りて、生意気なる書生風と」なってしまう。もちろん立身お家再興という「青雲の志」を捨てはしなかったが、「志」の補給が出来なくなってしまった。

翌1871年、植村は修文館漢学部に入學した。修文館「漢学部」は役人養成のための部門で、正久もそれ

を目指して入学したと考えられる。青芳勝久が著した『植村正久伝』には、修文館時代の友人として本多庸一、押川方義、井深梶之助に加えて既にヘボンの邦語教師であった奥野昌綱を挙げている。彼らは「大抵は旧幕臣であり、薩長の専横を憤る」共通点があったとしており、後に「天璋院殿の葬送を観て感を記す」（1883）に見られるような、明治政府から離れたスタンスを育んだのかもしれない。修文館で正久はブラウンから英語を学び始めるが、翌72年の初めにはバラ塾へ移りキリスト教を信じるようになった。

正久はバラから「西洋人も神様を礼拝しましたーそれはたった一人の神さまを、と教えられ…すぐさまその考えを理解して受け入れ」たという。正久が自分の入信の時期とする初週祈祷会での体験がこれに続く。初週祈祷会はバラ自身も驚くようないわゆるリバイバルの様相を呈したものであった。正久は友人たちが祈る姿に一方では「奇異の思いをなし」ながらも、他方「心のうちに宗教上の感覚を受けしこと少小にあらざり」、程なく「その晩から」祈るようになったという。文明開化の風潮にさらされて、彼の「志」は危機に瀕していた。その心の虚空に「唯一の真（まこと）の神」が強襲した(stormed)。彼は一瞬にしてキリスト教の神のとりこになってしまう。自分が仕えるべき相手を取り替えるというような悠長な問題ではなかった。「青雲の志」は、根本的に変わってしまい、そのために「志」の補強も不必要となる。まさに「青雲の志は神の現臨の前に破碎された」（雨宮）のである。その夜から彼は「祈る」ようになり、一週間後には、前に通っていた塾へ伝道に行ったという。「志」は「神」との間の出来事となった。

この回心の回顧談には、「罪の意識やキリストの贖いによる赦し」がきちんと理解されるにもそう時間がかからなかった」という文が続いている。人の罪とキリストによる贖いを、植村がいつ理解したのかという議論もなされてきた。もちろん理解の度が深まることはあろうが、彼は回心の初期にこれを理解していた。「人の罪」（1877）についての論考でも明らかだが、植村にとって「罪」というのは、神の前に、あるいは「キリストの品性」によって照らし出される「人の弱さ」なのである。逆にいうと、「唯一の真の神」に出会って、神に仕えたい、神に近づきたいという「志」を与えられなくては、人は今の自分を変えることもできず、周りに流されてしまっただけで「自立」できない存在となる他ない。

このように、植村は神信仰＝「志」を人間存在の根

底に関わるものと捉え、「世の中」に寄りかからず生きる力と捉えた。すべてが混沌として、表面的な変革だけが歓迎される維新変革期にあって、民権運動と対外的独立運動とも含めて、日本の新しい国作り社会作りのためには、このような人間が不可欠で、だからこそ日本伝道は急務だと植村は確信し、そのために全力を傾けて働こうとしたのである。

## ヘボン研究の現状

岡部 一 興

### ヘボンと高谷

まず高谷道男の人となりとヘボン研究に至るまでのことを概観したい。先生は2人の師が自分の人生を決定的なものにしたと言われた。第一には白雨会の一員として内村鑑三の教えを受け、十字架の贖いを教えられて信仰をもったことである。第二はヘボンである。1940（昭和19）年関東学院から明治学院に移った時、ヘボン資料が空襲で燃えては困ると東北学院に運ぶことになった。風呂敷包みに史料を入れて明治学院幹事の杉本民三郎さんという人と二人で交代して担いで上野から仙台まで運んだという。それがヘボンを担ぐようになった切っ掛けである。

先生は教育家として、学者として、またあるときは伝道者として、さまざまな影響をわたしたちに与えてくれた。先生の業績をみると、若い頃で注目すべきものは1935年に三省堂から出版した『基督教経済文化史』である。この書はウェーバーとトレルチェの研究に示唆されてカルヴァン研究を下敷きにキリスト教と経済の交錯を分析した画期的な研究であった。指導に当たった上田辰之助は経済史におけるカルヴァンの研究を期待していた。1938年には「M・ウェーバー〔プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神〕批判」を東大の『宗教研究』から発表し、大塚久雄よりずっと以前にウェーバー研究をしている。しかし、先生は次の年になると、同じく東大の『宗教研究』において「最初の日本語聖書翻訳出版に関する史実と文献」というテーマでギュッラフの研究を行い、次第に日本プロテスタント史に傾斜していくのである。その後、1944年明治学院に移りヘボンに出会ってからヘボン研究に没頭し、ヘボンに明け暮れる毎日が続いた。この研究

は『ヘボン書簡集』として、また『S. R. ブラウン書簡集』、『フルベッキ書簡集』として出版された。こうして日本プロテスタント・キリスト教史の代表的な宣教師の書簡を著したことによって、宣教師がどのような伝道活動をしたかの足跡が書簡を通して明らかになり、これによって日本のキリスト教史が大きく前進した。

横浜プロテスタント史研究会の関係では、ヘボン来日 120 周年を記念して『ヘボンと横浜』（グラビア版）という題で、横浜市市民局市民活動部広報課広報センターから 1979 年 10 月に発行、再版も出た。

高谷先生はいつもオリジナルな資料に基づいて研究することの大切さを強調されていた。歴史を学ぶときに原資料にあたること、自分の目で見ること、そこにヒストリアンの忘れてはならない意義があるとした。日本においてキリスト教史の研究をする研究者の中でいち早く宣教師のミッション・レポートに手をつけたのは高谷先生であった。

1872 年 9 月日本在留の宣教師が集まって第 1 回宣教師会議がヘボンの施療所で開催された。そのとき 3 つの事が決まった。公会主義の件が話しあわれ、聖書の共同訳、讃美歌の編集、教派にあらざる神学校の建設などを決めた。新約聖書翻訳委員会では翻訳した物を分冊で発行、17 分冊中ヘボンが手がけたのは、ブラウンとの訳を含めて 11 冊になる。宣教師では最終的に翻訳に従事したのはヘボン、S. R. ブラウン、D. C. グリーンの 3 人だった。翻訳委員会訳が 1874 年から実際にスタートし、1879 年 11 月 3 日に完了、1880 年 4 月 19 日新栄橋教会において完成祝賀感謝会を行った。

次に 1878 年 5 月の宣教師会議により旧約東京翻訳委員会に代わって、各ミッションから選出された旧約聖書の聖書常置委員会が発足した。N. ブラウン、カクラン、ヘボン、S. R. ブラウン、ライト、ワッデル、ゴープル、クレッカー、マクレー、クインビー、D. C. グリーン、パイパーの 12 名だった。同年 12 月ヘボンを委員長、カクランを書記としてスタート。旧約聖

書は 1882 年以來、分冊にして発行された。その中でヘボンが携った翻訳は、28 分冊中ヘボンは 15 分冊であった。ヘボン研究において未開拓の分野は、ヘボンがどのように聖書和訳をしたかの研究が今後の課題といえよう。

### 『ヘボン在日書簡全集』の出版

この書に収録した書簡は 235 通にのぼる。その中身はヘボンが在日 33 年間にアメリカ長老教会のミッションに書き送った書簡とヘボンが手紙を書くことが出来なかった時、クララ夫人が書いた手紙が 18 通、ヘボン帰国後山本秀雄や井深梶之助、毛利官治などに送った書簡が 20 通含まれている。そのはじめ、「ヘボン書簡集補遺」という形で考えていた。しかし、補遺を出しても読者は前の高谷さんの『ヘボン書簡集』を読みたくなるだろうと考えて、いっそのこと、暦年順にして 33 年間の書簡を並べてみたらどうかという発想になったわけである。今回、教文館の波部満社長が出版の意義を汲み取って頂き、岩波書店の社長に掛け合い出版権を譲り渡して頂いてこのような本を作ることが出来た。1984 年頃、指路教会の有地美子さんが高谷先生からヘボンのマイクロフィルムの書簡をタイプするように依頼され、さらに翻訳することを頼まれた。そして毎週のように日曜日教会で高谷さんに翻訳した書簡を手渡していた。夫の良祐さんのサポートもあって翻訳が進んだ。

今回、『ヘボン在日書簡全集』としてまとめたものは、33 年間の日本における活動を網羅しているの、ヘボンの実像がこれらの書簡を通してより鮮明になるのではないと思われる。またヘボンの日本における功績を見る場合、ヘボンの陰で支えた妻クララの事が見落とされていたが、クララの手紙を通してヘボンの姿がより鮮明になると思われる。なお、『ヘボン在日書簡全集』の内容そのものについては、時間的なこともあるので、どうぞ皆様に読んで頂いてご批評を仰ぎたいと思うものである。

#### 《会員著書紹介》

小宮まゆみ『敵国人抑留一戦時下の外国民間人』  
吉川弘文館 2009 年 3 月 1,800 円  
アジア・太平洋戦争勃発とともに、日本国内にいた外国籍の民間人は、各地の抑留所に収容された。長い間の研究成果がこのような形で結実した。

齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記—明治期における米国メソジスト教会の海外伝道』新教出版社  
2,800 円 女性宣教師たちの伝道活動は、学校教育と文筆や出版活動の面でも優れた活動を行い、「地利的知識」の普及者でもあり伝達者でもあった。地理の視点から明治期の女性宣教師に着目した労作。

## 横浜プロテスタント史研究会会計報告

### 2009年度会費納入者

#### 《編集後記》

会報47号をお届けします。玉原稿ありがとうございます。会報は年2回、4月と10月に発行しています。今年は遅れて11月20日になってしまいました。お詫びします。研究会の発表者、推薦して頂いたり、また積極的に申し出て頂けるとありがたいです。(岡部)